

第四十四回クワン全国吟詠コンクール課題詩(一)

<p>鳥江亭に題す(杜牧) 勝敗は兵家も事期せず 羞を包み恥を忍ぶは是れ男児 江東の子弟才俊多し 卷土重 来未だ知るべからず</p>	<p>客舎の壁に題す(雲井龍雄) 斯の志を成さんと欲して豈躬を思わんや 骨を埋む青山碧海の中 酔つて宝刀を撫し還冷笑す 決然馬を躍らして関東に向う</p>	<p>偶感(西郷南洲) 幾たびか辛酸を歴て志 始めて堅し 丈夫玉碎するも軋全を恥ず 我が家の遺法人知るや否や 児孫の為に美田を買わず</p>	<p>春暁(孟浩然) 春眠暁を覚えず 処処啼鳥を聞く 夜来風雨の声 花落つること知ぬ多少ぞ</p>
<p>雨後登楼(釈絶海) 一天の過雨新秋を洗う 友を携えて同じく登る江上の楼 写かんと欲す仲 直千古の恨 断烟疎樹愁に堪えず</p>	<p>峨眉山月の歌(李白) 峨眉山月半輪の秋 影は平羌 江水に入つて流る 夜清溪を発して三峽に向う 君を思えども見えず渝州に下る</p>	<p>桂林雜詠諸生に示す(その二)(広瀬淡窓) 道ことを休めよ他郷苦辛多しと 同袍友有り自ら相親しむ 柴扉暁に出ずれば霜雪の如し 君は川流を汲め我は新を拾わん</p>	<p>春日家に帰る(正岡子規) 車に乗り馬に騎つて早く帰り来る 一たび双親に謁すれば喜び自ら催す 処々鶯 啼いて春海に似たり 故園の芳樹吾を待つて開く</p>
<p>海を望む(藤井竹外) 鵬際晴れ開く九万の天 無人の島は定めて何れの辺なる 風を追う狂 浪奔馬の如く 忽ち巉礁に触れ砕けて煙と作る</p>	<p>凱旋(乃木希典) 王師百万驕 虜を征す 野戦攻城 屍 山を作す 愧ず我何の顔あつてか父老に看えん 凱歌今日幾人が還る</p>	<p>坂本龍馬を思ふ(河野天籟) 幕雲日を捲つて日将に傾かんとす 南海の臥龍帝京に翔る 一夜狂 風幹を折ると雖も 維新の大業 君に頼つて成る</p>	<p>鐘山即事(王安石) 澗水声無く竹を繞つて流る 竹西の花草春 柔を露わす 茅簷相對して坐すること終日 一鳥鳴かず山更に幽なり</p>
<p>夏白愔空上人の院に題するの詩(杜荀鶴) 三伏門を閉じて一衲を披く 兼ねて松竹の房廊を蔭つ無し 安禅は必ずしも山水を須いず 心頭を滅却すれば火も亦涼し</p>	<p>菊花(白居易) 一夜新霜瓦に著いて軽し 芭蕉は新たに折れて敗荷は傾く 寒に耐うるは唯東籬の菊のみ有つて 金粟の花は開いて暁 更に清し</p>	<p>山中問答(李白) 余に問う何の意あつてか碧山に棲むと 笑つて答えず心 自ら閑なり 桃花流 水杳然として去る 別に天地の人間に非ざる有り</p>	<p>時事偶感(杉浦重剛) 昨は非とし今は是とす又何をか論ぜん 世を挙げて皆知る道義の尊きを 三復吟するに堪えたり古人の句 日月を双び懸けて乾坤を照らす</p>
<p>雁を聞く(韋応物) 故園渺として何れの処ぞ 歸思方に悠なる哉 淮南秋雨の夜 高齋雁の来るを聞く</p>	<p>金州城下の作(乃木希典) 山川草木転た荒涼 十里風腥 し新戦場 征馬前まず人語らず 金州 城外斜陽に立つ</p>	<p>四時(陶潜) 春水四沢に満ち 夏雲奇峰多し 秋月明輝を揚げ 冬嶺孤松秀す</p>	<p>絶句(杜甫) 江碧にして鳥逾 白く 山青うして花然えんと欲す 今春看 又過へ 何れの日か是れ帰年ならん</p>